

第20回(平成26年度)

「水にかかわる生活意識調査」結果レポート

=水道水への評価上昇も、3人に1人は“水道水以外”の水を最も飲む=

ミツカン水の文化センター(事務局:東京都中央区新川1-22-15茅場町中埜ビル 株式会社Mizkan Holdings 東京ヘッドオフィス内)では、本年6月中旬に、東京圏、大阪圏、中京圏の在住者1,500名を対象に、平成26年度「水にかかわる生活意識調査」を実施し、このほど集計結果がまとまりました。

今回は、本調査における「水と災害」に関する意識・実態把握の一環として、防災の実態を探るべく、これまでの設問に加え、“ハザードマップ”に着目した新たな調査を行いました。

「水にかかわる生活意識調査」は、センター設立に先立ち、1995年に第1回目を実施して以来、ほぼ同じ内容で毎年6月に行っており、今回が節目の20回目となります。日常生活と水とのかかわりや意識、水と文化などについてアンケート形式で調べるという手法により、20年間にわたって生活者の実感としての水の諸相を明らかにしてまいりました。(調査データおよび数表データは、別途HPで紹介しています。)

《今回の3大トピックス》

【1】ゲリラ豪雨への恐怖

…不安に感じる水の災害で、「ゲリラ豪雨」が1位に

【2】防災対策、大丈夫？

…ハザードマップの認知率は4割未満、7割以上が“活用せず”

…災害時に対する水の備えを“何もしていない”人が、4割超に増加

【3】水道水への評価が上昇

…全般的な水道水評価は、10点満点中7.44点

…飲用としての水道水評価は、10点満点中7.19点

【この件に関するお問い合わせ先】

ミツカン水の文化センター 事務局

〒104-0033 東京都中央区新川1-22-15茅場町中埜ビル

株式会社Mizkan Holdings 東京ヘッドオフィス内

TEL.03-3555-2607 FAX.03-3297-8578 <http://www.mizu.gr.jp>

* 第1回(1995年)～第19回(2013年)「水にかかわる生活意識調査」の集計概要は、上記HPで紹介しています。

《結果の抜粋と掲載ページ》

■調査概要	2ページ
■水道水に関する意識／東京・大阪・中京圏	
【水道水への評価】	
◇水道水の評価は10点満点中7.44点	3ページ
◇飲用としての水道水の評価は10点満点中7.19点	3ページ
◇水道水への不満、「特にない」が1位も、数値は若干下がる 「料金が高い」の数値上昇は、消費増税の影響か？	4ページ
【水道水の飲用実態】	
◇ふだん家庭で飲んでいる水は、約7割が「水道水」。	4ページ
◇3割超が「水道水」以外の水を最も飲んでいる	4ページ
◇水道水の飲用方法、“そのまま”では飲まない人が6割超 一人暮らしの人は、そのまま飲む割合が高い	5ページ
◇飲用方法別の水道水の評価は、「そのまま飲む」人は10点満点中8点	5ページ
■水と災害／東京・大阪・中京圏	
◇不安に感じる水の災害、「ゲリラ豪雨」がトップに	6ページ
◇「ゲリラ豪雨」は、発生回数が少ない大阪圏で“最も不安に感じる水の災害”	6ページ
【ハザードマップの認知と活用実態】	
◇ハザードマップの認知率は、4割未満	6ページ
◇4割超が、自分の地域にハザードマップがあるか「わからない」	7ページ
◇7割超が、ハザードマップを活用していない	7ページ
◇災害時に対する水の備え、“備えてない人”の増加傾向が、より顕著に 東京圏では「ミネラルウォーター買い置き」が激減	7ページ
■日常の水意識／東京・大阪・中京圏	
◇“節水している人”は半数程度にまで減少	8ページ
◇水のありがたさを感じる時、トップ3は「給水制限」「のどの渴きをいやす」「入浴やシャワー」	8ページ
◇水にかかわる経験・認知率の低下が進む	9ページ

【調査概要】

第20回(平成26年度)「水にかかわる生活意識調査」

- ◆調査対象数 : 1,500票
- ◆調査対象者 : 東京圏(東京、神奈川、埼玉、千葉)、大阪圏(大阪、兵庫、京都)、中京圏(愛知、三重、岐阜)に居住する20歳代から60歳代の男女
- ◆調査方法 : インターネット調査
- ◆調査期間 : 平成26年6月5日(木)～6月10日(火)
- ◆回収数(人) :

	東京圏		大阪圏		中京圏		合計		小計
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	
20代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
30代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
40代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
50代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
60代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
合計	250	250	250	250	250	250	750	750	1,500
	500		500		500				

水道水に関する意識／東京・大阪・中京圏

【水道水への評価】

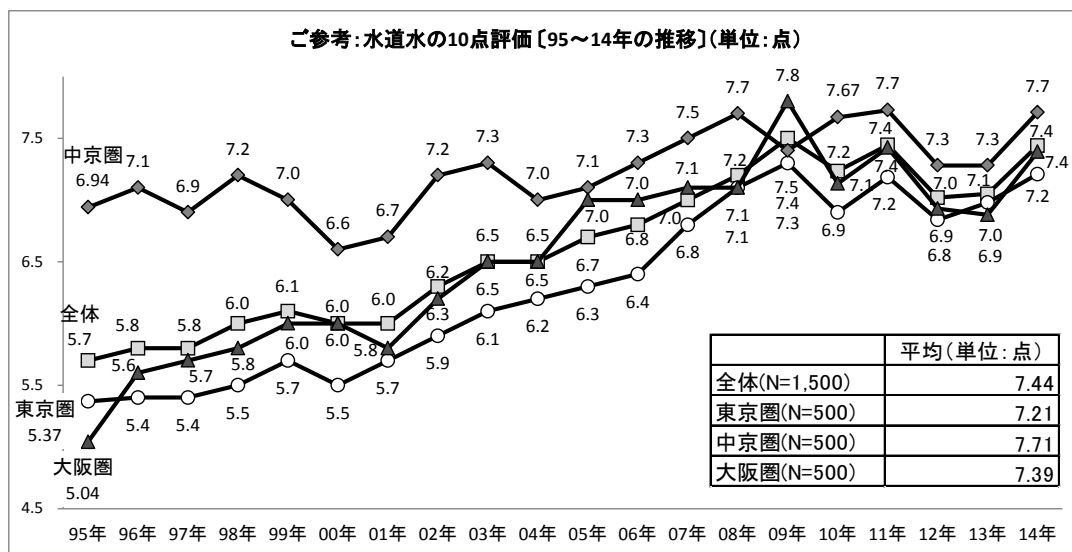
Q.水道水を10点満点で評価すると？（0～10の整数を自由回答）

◇全体の平均は7.44点

世界トップレベルの安全性を誇る日本の水道水。その評価は、ここ数年下降傾向にありましたが、今回はどうだったのでしょうか？

10点満点で聞いたところ、全体の平均は7.44点と昨年(7.05点)から0.39ポイント上昇し、10点満点をつけた人が16.3%と、昨年(8.2%)からほぼ倍増しました。

居住地別では中京圏が7.71点で昨年と変わらずトップでしたが、東京圏と大阪圏もそれぞれ7.21点、7.39点と、3年ぶりに7点台を回復しました。



対象エリア：1995年…東京都、大阪府、愛知県、1996～2014年…東京圏(1都3県)、大阪圏(2府1県)、中京圏(3県)
有効回答数：1995～2009年…467～554、2010～2014年…1,500

Q.水道水を飲用水として10点満点で評価すると？（0～10の整数を自由回答）

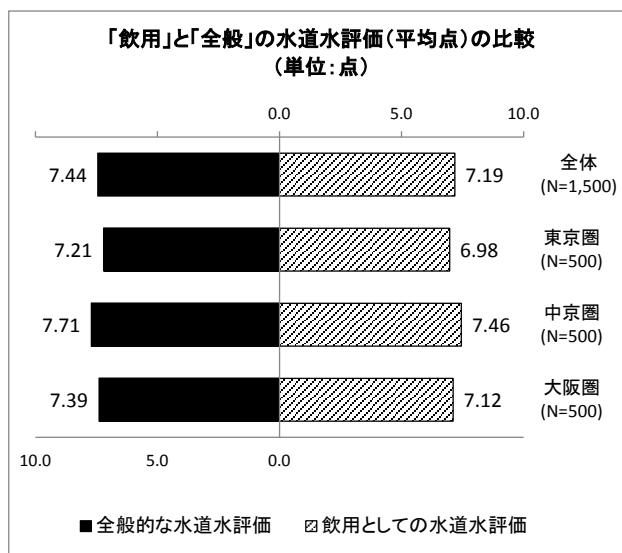
◇全体の平均は7.19点

次に、飲用目的に限定した水道水の評価を前述の全般的な水道水評価と同様に10点満点で聞いたところ、全体の平均は、昨年(6.83)から0.36ポイントアップの7.19点と、こちらも数値が上昇しました。

居住地別では中京圏が昨年に続きトップ(7.46点)、次いで大阪圏(7.12点)、東京圏(6.98点)と、傾向的には全般的な水道水への評価と変わりませんでしたが、東京圏のみ7点台に届きませんでした。

飲用としての水道水 10 点評価(平均点)

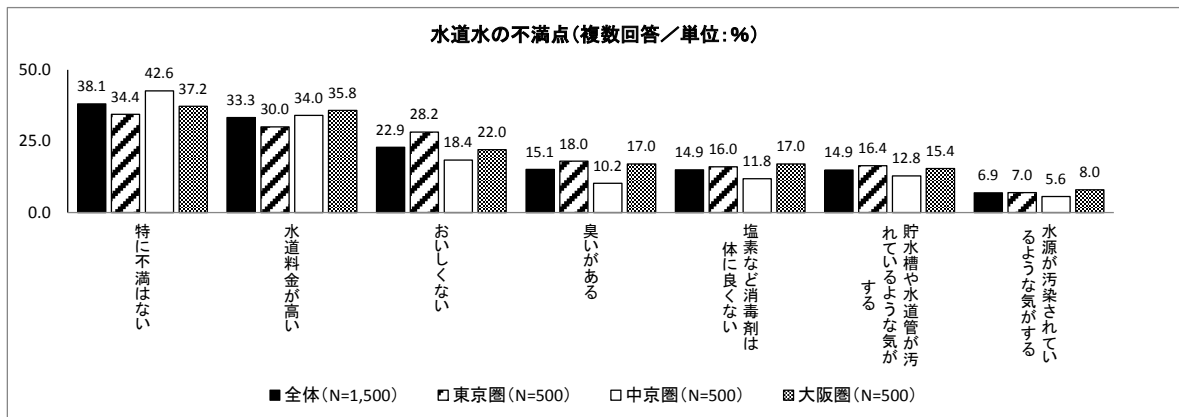
	平均(単位：点)
全体(N=1,500)	7.19
東京圏(N=500)	6.98
中京圏(N=500)	7.46
大阪圏(N=500)	7.12



Q.水道水について不満を感じていることは？（8択＋その他＋特に不満はない）

◇「特に不満はない」が1位も、数値は若干下がる

「料金が高い」の数値上昇は、消費増税の影響か？



「水道水に対する不満」を聞いたところ、1位は昨年と変わらず「特に不満はない」(38.1%)でしたが、その数値は昨年の40.2%から若干下がりました。

一方、「不満」の1位は「水道料金が高い」(33.3%)、2位「おいしくない」(22.9%)と、例年と同様の結果でした。「水道料金が高い」の数値が昨年(29.4%)から3.9ポイント上昇しましたが、これは、今年4月からの消費増税が少なからず影響したのかもしれませんが。

【水道水の飲用実態】

Q.ふだん家庭で飲んでいる水は？（5択＋その他＋水は飲まない）

Q.ふだん家庭で最も飲んでいる水は？（5択＋その他）

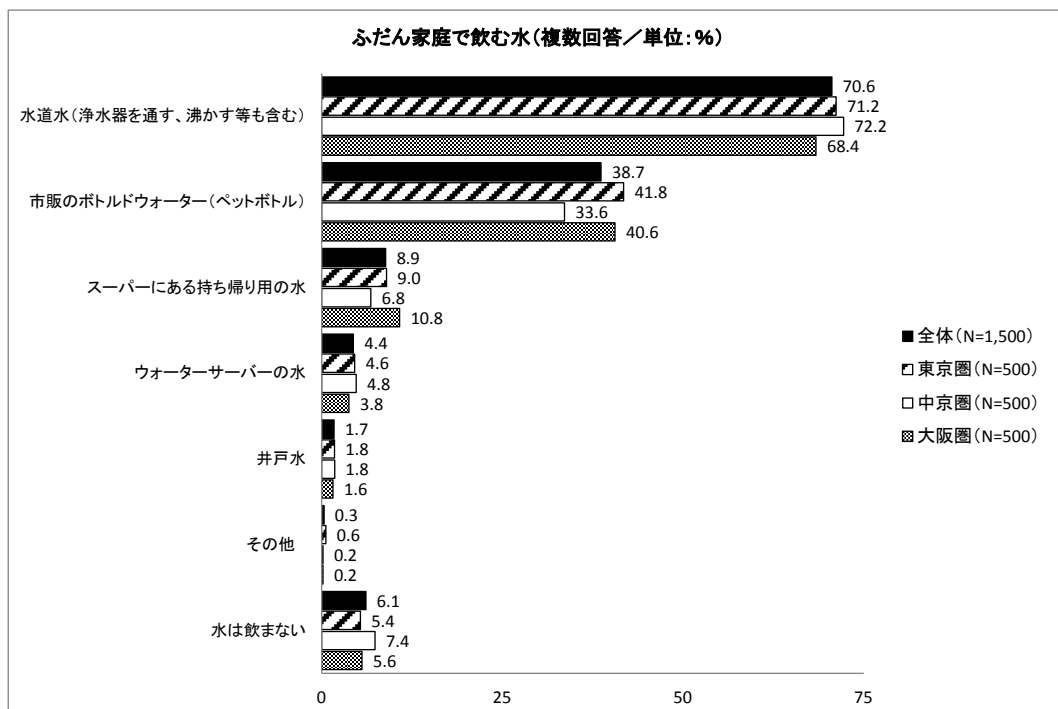
◇約7割が「水道水」を飲んでいる

◇3割超が「水道水」以外の水を最も飲んでいる

それでは、家庭ではどのような水が飲まれているのでしょうか？

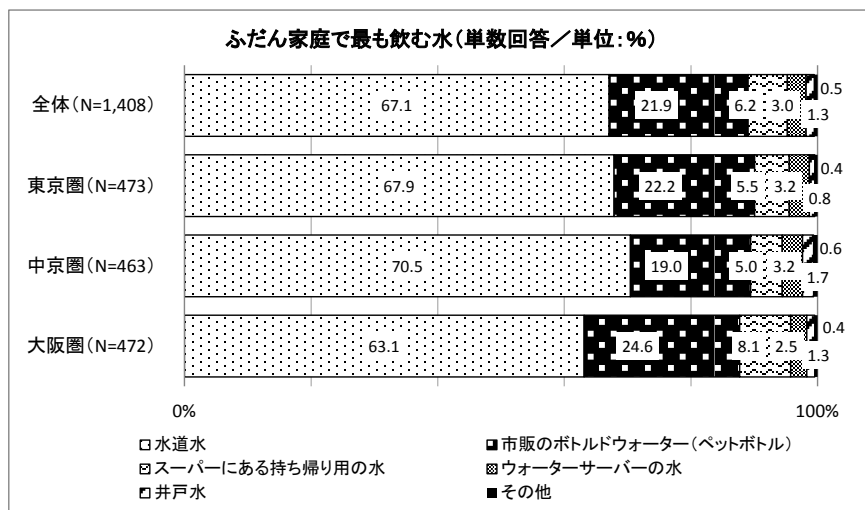
結果は、「水道水」(70.6%)が7割超の回答を得て1位となり、「市販のボトルドウォーター」(38.7%)がこれに続き、「水は飲まない」人は6.1%でした。

居住地別の順位は、3エリアとも1位「水道水」(東京圏71.2%、大阪圏68.4%、中京圏72.2%)、2位「市販のボトルドウォーター」(東京圏41.8%、大阪圏40.6%、中京圏33.6%)でしたが、東京圏と大阪圏は「市販のボトルドウォーター」の数値が4割を超えたのに対し、中京圏では3割少々と、地域差がありました。



次に、「水は飲まない」人を除いて「最も家庭で飲んでいる水」を聞いたところ、1位「水道水」(67.1%)、2位「市販のボトルドウォーター」(21.9%)、3位「スーパーにある持ち帰りの水」(6.2%)、4位「ウォーターサーバーの水」(3.0%)、5位「井戸水」(1.3%)と、順位は昨年と変わりませんでした。大多数の人が「水道水」を挙げる一方で、約3人に1人が「水道水」以外を家庭で飲むメインウォーターとしています。

居住地別では、東京圏は「水道水」(67.9%)が昨年(59.1%)から8.8ポイント上昇したのに対し、大阪圏は5.0ポイント減少(昨年68.1%→今回63.1%)するなどの増減がみられました。



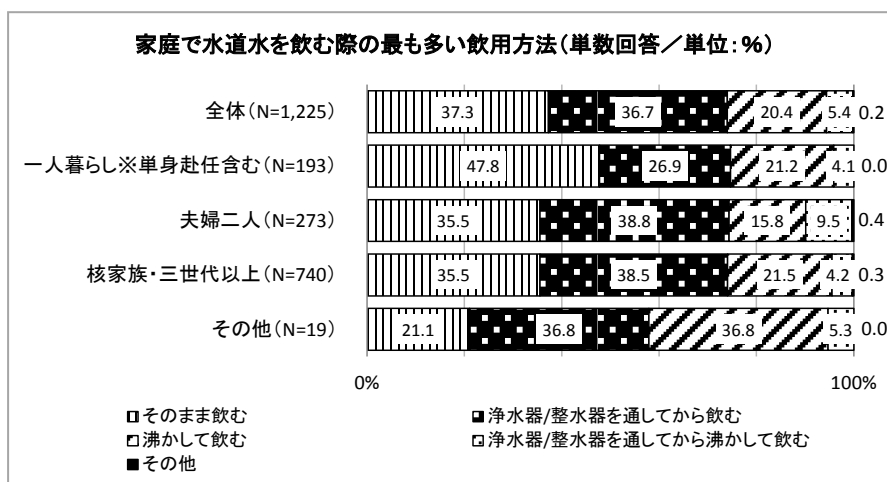
Q.家庭で水道水を飲む際の最も多い飲用方法は？ (4択+その他)

◇“そのまま”では飲まない人が6割超

一人暮らしの人は、そのまま飲む割合が高い

「水道水を飲む際の最も多い飲用方法」の結果は、1位「そのまま飲む」(37.3%)、2位「浄水器/整水器を通してから飲む」(36.7%)、3位「沸かして飲む」(20.4%)となり、2位「浄水器/整水器を通してから飲む」以下、「その他」(0.2%)までの“何らかの手を加えて飲む人”(=“そのままでは飲まない人”)の割合は、昨年と変わらず6割超(62.7%)でした。

なお、同居の家族構成別にみると、一人暮らし(単身赴任含む)は「そのまま」が47.8%と、夫婦二人(35.5%)や核家族・三世代以上の家族(35.5%)に比べて数値が高く、「浄水器/整水器を通して」が26.9%と他の家族構成(夫婦38.8%、核家族・三世代以上38.5%)より低いなど、独自色を見せました。



◇「そのまま飲む」人の飲用としての水道水評価は、10点満点中8点

飲用方法別の水道水10点評価(平均点)

	平均(単位:点)
全体(N=1,500)	7.19
そのまま飲む人(N=456)	8.00
手を加えて飲む人(N=769)	7.11
水道水は飲まない人(N=275)	6.07

3頁の「飲用としての水道水10点評価」を、上記の飲用方法別で見ると、「そのまま飲む」人の平均は8.00点と「全体」の平均(7.19点)を大きく上回る高得点でした。一方、「水道水は飲まない」人の平均は6.07点で、「全体」の平均を大きく下回りました。この結果を踏まえると、飲用としての水道水への評価が低い人ほど、水道水を飲用の対象とは見ていないと言えるかもしれません。

水と災害／東京・大阪・中京圏

Q.不安を感じる水の災害は？（18択＋その他＋特に不安を感じたことはない）

◇「ゲリラ豪雨」が全体のトップに

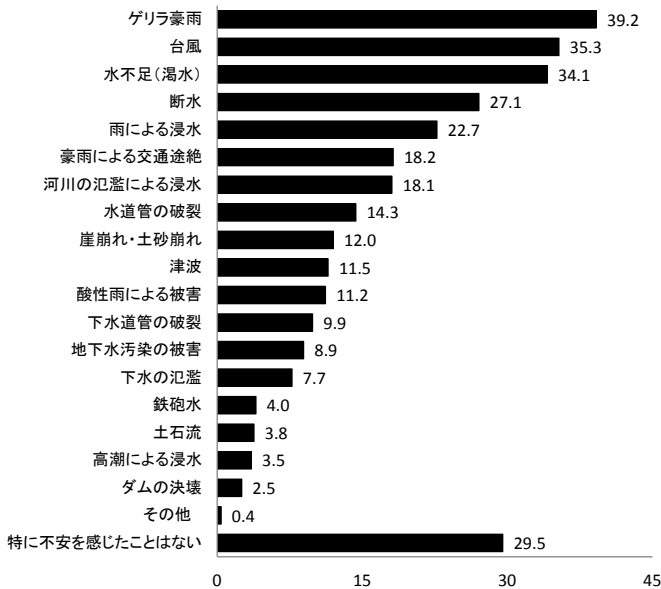
◇「ゲリラ豪雨」は、発生回数が少ない大阪圏で“最も不安を感じる水の災害”

今回新たな選択肢として「ゲリラ豪雨」を追加し、「不安を感じる水の災害」を聞いたところ、4割近く(39.2%)の回答で「ゲリラ豪雨」がトップとなり、2位「台風」(35.3%)、3位「水不足」(34.1%)と続きました。

次に、「特に不安を感じたことはない」の回答者を除いた「最も不安を感じる水の災害」を聞いたところ、こちらでもトップ3は、1位は「ゲリラ豪雨」(19.3%)、2位「台風」(17.2%)、3位「水不足」(17.1%)でした。ただ、局住地別でみると、「ゲリラ豪雨」がトップだったのは大阪圏(22.9%)のみで、東京圏の1位は「水不足」(19.4%)、「ゲリラ豪雨」は16.2%で3位)、中京圏の1位は「台風」(19.0%)、「ゲリラ豪雨」は18.8%で2位)という結果でした。2013年7月23日～9月30日の大阪府におけるゲリラ豪雨発生回数は38回で、東京都(116回)の約3分の1だった*ことを踏まえると、大阪圏では「ゲリラ豪雨」未経験者による“未知への恐怖感”が数値を押し上げた可能性も考えられます。

*出典：ウェザーニューズ社「今夏の“ゲリラ雷雨”発生回数まとめ(2013年10月発表)」より

不安を感じる水の災害(複数回答／単位：%)
N=1,500(全体)



最も不安を感じる水の災害トップ5(単数回答／単位：%)

	全体(N=1057)	東京圏(N=346)	中京圏(N=357)	大阪圏(N=354)
1位	ゲリラ豪雨 19.3	水不足 19.4	台風 19.0	ゲリラ豪雨 22.9
2位	台風 17.2	台風 17.1	ゲリラ豪雨 18.8	水不足 16.7
3位	水不足 17.1	ゲリラ豪雨 16.2	水不足 15.4	台風 15.5
4位	雨による浸水 9.6	断水 10.4	雨による浸水 10.9	雨による浸水 8.5
5位	断水 9.6	雨による浸水 9.5	断水 9.8	断水 8.5

※全体および大阪圏は、「雨による浸水」「断水」が同率4位

【ハザードマップの認知と活用実態】

ミツカン水の文化センターでは、本調査において「水と災害」に対する意識・実態の把握を目的に、これまで「不安を感じる水の災害」や「災害時に対する水の備え」に関する調査を行ってききましたが、今回より、「ハザードマップ」に着目した設問を新たに追加し、その認知や活用状況を探りました。

Q.ハザードマップの認知は？（3択）

Q.居住地域のハザードマップの有無は？（3択）

Q.ハザードマップの活用状況は？（3択）

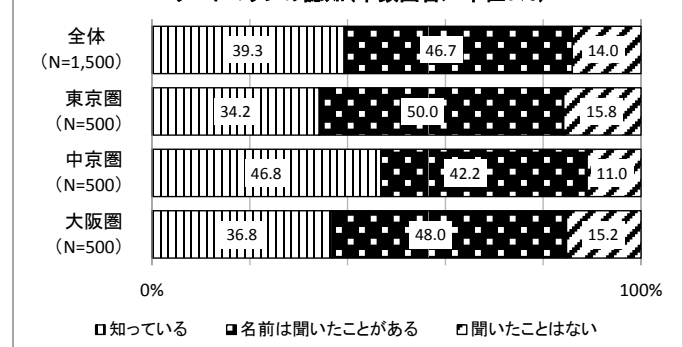
◇4割に満たない認知率

◇4割超が、自分の地域にマップがあるか「わからない」

◇7割超が「活用していない」

まず、「ハザードマップの認知」について聞いたところ、最も多かったのは「名前は聞いたことがある」(46.7%)で、内容も含め「知っている」人は39.3%にとどまりました。なお、居住地別で最も認知率が高かったのは、中京圏(46.8%)でした(東京圏34.2%、大阪圏36.8%)。

ハザードマップの認知(単数回答／単位：%)

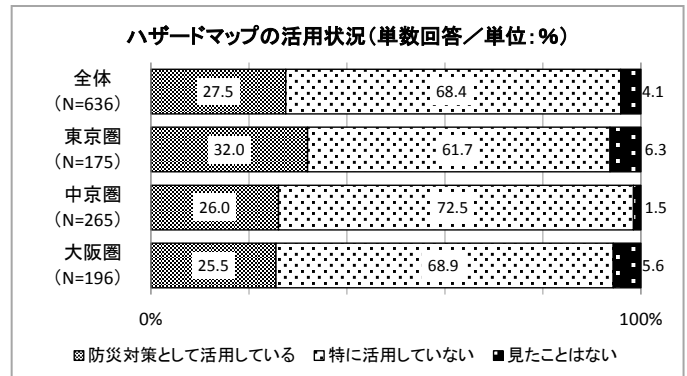
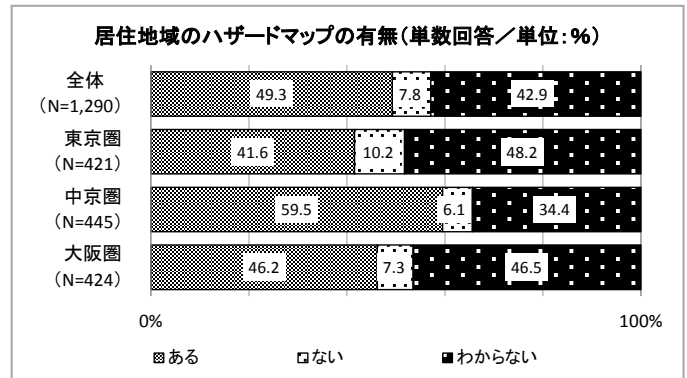


次に、「ハザードマップを聞いたことがない」人を除いて、自分の居住地域におけるハザードマップの有無を尋ねると、約半数(49.3%)が「ある」と回答しましたが、その一方で、4割超(42.9%)が、自分が住んでいる地域なのにもかかわらず、あるかどうか「わからない」人でした。

それでは、ハザードマップは実際にどれくらい活用されているのでしょうか？

前問で居住地域にハザードマップが「ある」と回答した人に、その活用状況を聞いたところ、「防災対策として活用している」人は27.5%にとどまり、7割超(72.5%)が「活用していない」(「特に活用していない」と「見たことはない」の合計)という実態が浮き彫りになりました。ちなみに、居住地別の活用率をみると、東京圏が他のエリアに比べて若干高い数値を示しました(東京圏32.0%、大阪圏25.5%、中京圏26.0%)。

以上の結果を踏まえると、ハザードマップに対する関心度は、決して充分とは言えないようです。



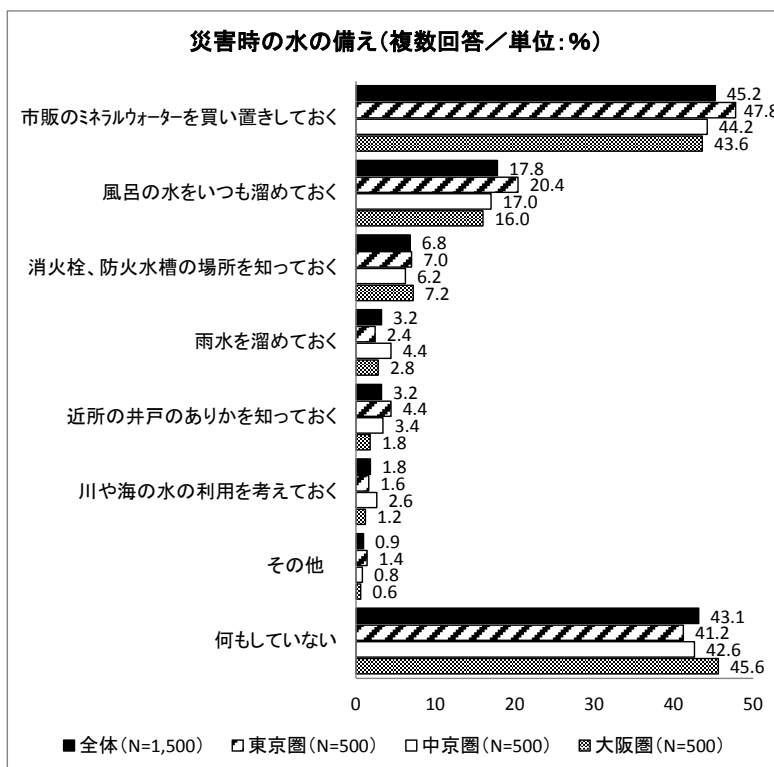
Q.災害時に対する水の備えは？ (6択+その他+何もしていない)

◇“備えなし”の増加傾向が、より顕著に

東京圏では“ミネラルウォーター買い置き”が激減

「災害時に対する普段の水の備え」は、「何もしていない」が昨年から4.5ポイント増の43.1%、「ミネラルウォーターを買い置きしておく」が4.5ポイント減の45.2%となり、昨年垣間見えた東日本大震災後の経年による危機意識の薄れとも読み取れる傾向が、より顕著に現れました。

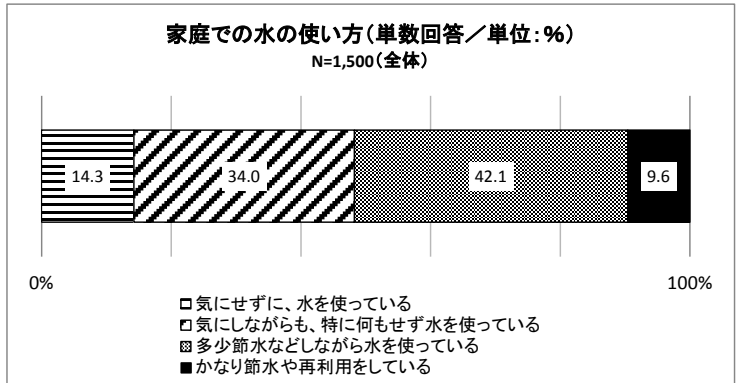
中でも東京圏は、昨年3割程度だった「何もしていない」人の割合が4割超(41.2%)に跳ね上がり、「ミネラルウォーターの買い置き」は47.8%(昨年比11.4ポイント減)と激減しました。



Q.水の使い方は？（4択）

◇“節水している人”は半数程度にまで減少

日常生活における節水への意識に、変化は見られたのでしょうか？
 「家庭での水の使い方」について聞いたところ、「かなり節水や再利用をしている」と回答した人は9.6%と昨年から1.6ポイント減少し、10%を割り込みました。また、「多少節水や再利用をしている」人も昨年から6.3ポイント減の42.1%となり、これらを合計した“節水している人”は51.7%（昨年比7.9ポイント減）にまで落ち込みました。

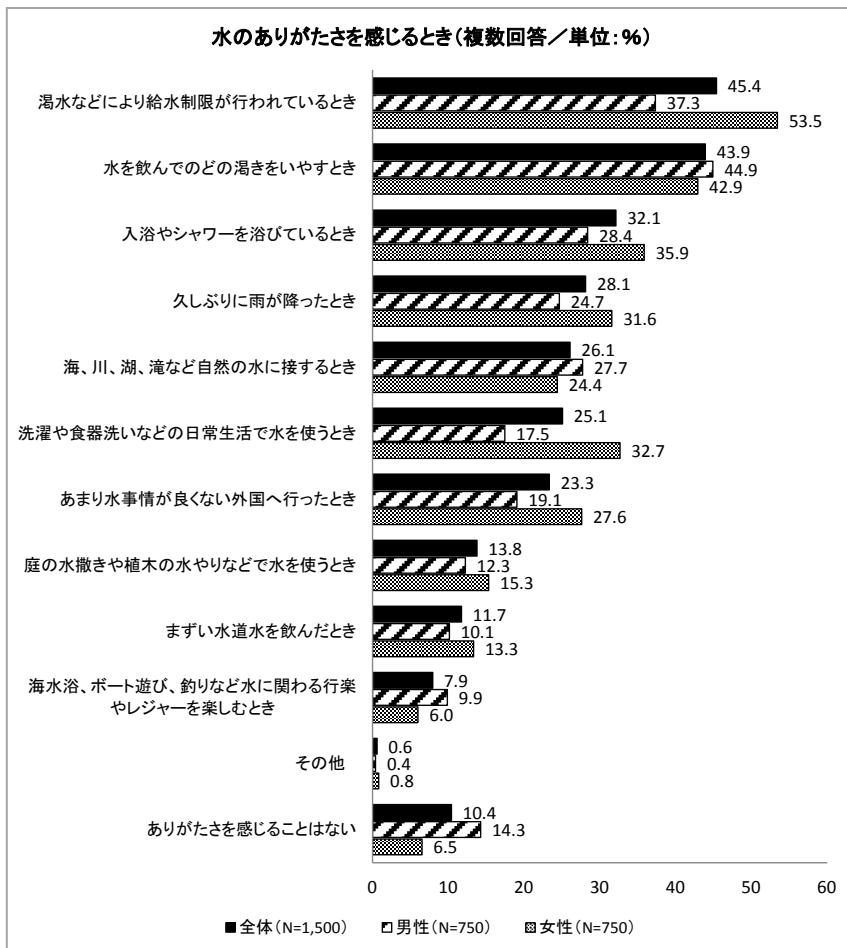


Q.水のありがたさを感じるときは？（10択+その他+感じることはない）

◇トップ3は「給水制限のとき」「のどの渇きをいやすとき」「入浴やシャワーのとき」

「水のありがたさを感じるとき」を聞いたところ、1位「給水制限が行われているとき」(45.4%)、2位「のどの渇きをいやすとき」(43.9%)、3位「入浴やシャワーを浴びているとき」(32.1%)となり、トップ3は昨年と変わりませんでした。

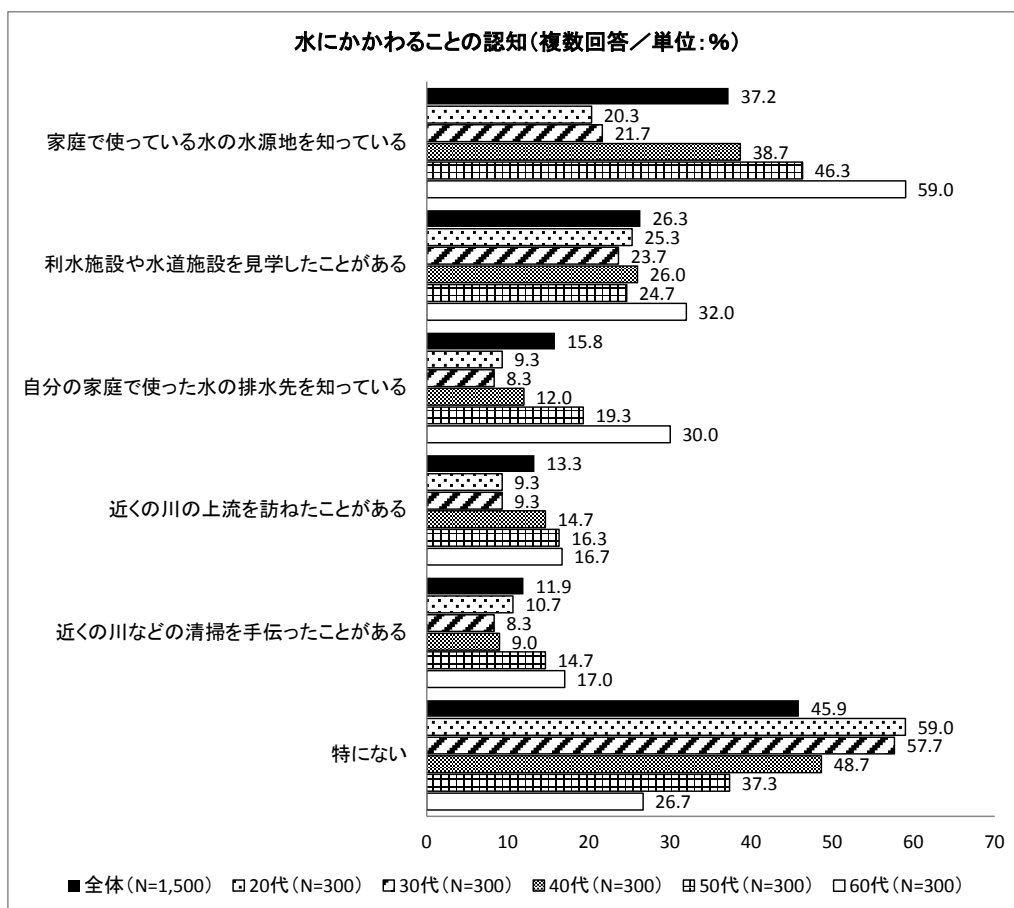
男女別では、「給水制限が行われているとき」(男性2位:37.3%、女性1位:53.5%)、「のどの渇きをいやすとき」(男性1位:44.9%、女性2位:42.9%)、「入浴やシャワーを浴びているとき」(男性3位:28.4%、女性3位:35.9%)と、トップ3の項目は全体と同じでしたが、「洗濯や食器洗いなど日常生活で水を使うとき」は、女性の3人に1人(32.7%)が回答したのに対し、男性はそのほぼ半数の17.5%、「ありがたさを感じることはない」は、男性が14.3%だったのに対し、女性は6.5%と倍以上の差がつくなどの違いがみられました。



Q.水にかかわることで知っていること、経験のあることは？（5択＋特にない）

◇水にかかわる経験・認知率の低下が進む

水にかかわる事例を5つあげて経験・認知を聞いたところ、これまで1位を保持していた「使っている水の水源地を知っている」が、昨年より3.6ポイント減（昨年40.8%→今回37.2%）で2位に下がりました。代わりに1位となったのは「特にない」で、こちらは昨年から6.4ポイント上昇（昨年39.5%→今回45.9%）しました。年代別では、「特にない」が20代（59.0%）、30代（57.7%）、40代（48.7%）、50代（37.3%）、60代（26.7%）と、年代が低いほど水にかかわる経験・認知率が上がり、「水源地を知っている」は60代（59.0%）、50代（46.3%）、40代（38.7%）、30代（21.7%）、20代（20.3%）と、年代が高いほど数値が上がるという、例年と同様の傾向でした。



参考 「ミツカン水の文化センター」と「水にかかわる生活意識調査」について

ミツカングループは1804年(文化元年)の創業以来、食酢の醸造を社業の中心としてきました。食酢の醸造に水は欠かせないものであり、ミツカングループは水の恩恵を受け、水によって育てられてきたといっても過言ではありません。それだけに、ミツカングループの水に対する関心は創業当時から一貫して高いものがありました。

1999年1月に、「水の文化」に関するさまざまな研究や情報交流活動を推進していく母体として「ミツカン水の文化センター」を設立。センターを活動拠点に研究活動、機関誌「水の文化」の年3回の発行、ホームページでの情報提供、「使いながら守る水循環」を学ぶ市民参加型ワークショップ「里川文化塾」の実施など、様々な活動を行っています。「水にかかわる生活意識調査」も「ミツカン水の文化センター」の活動の一環として実施しているもので、研究事業の、そして一般生活者の啓発活動の基礎資料として有効活用していきます。